

宇野千代全集

第八卷

宇野千代全集

第八卷

宇野千代全集 第八卷

昭和五十二年十月十日印刷

昭和五十二年十月二十日発行

著 者 宇野千代

発行者 高梨 茂

印刷者 山本正宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七七

小說
八

目次

薄墨の桜

雨の音

チェリーが死んだ

あとがき

書誌

264 263 239 127 5

薄
墨
の
桜

その一

私が薄墨の桜を観に行きたいと思ったのは、さして風流な気持があったからではありません。しかし、或る人から、その桜のことを聞いた当座は、闇雲に行つて見たいと思つたものでした。「そうだな、幹の回りが三丈八尺、枝の拡がりが約二反歩だと言うんだから、美事なものだよ。」と、その人は言つてから、「それがね、一べん枯れそうになつたのを、桜の若木の根を、何百本も根継ぎしたんだよ。面白いじゃないか。」と言いました。いつでも、人の話を勝手に粉飾して、自分の想像したもの、さもそれが眼の前にあるもののように思つて了う癖のある私は、その桜の、二反歩も枝を拡げて咲いているさまが、眼に見えるような気がしたのです。それに、これは内証の話ですが、樹齡千二百年と言う老樹に、若木の根を何百本も継いで蘇生させたと云う話は、老人の私には興味のあることだったので。

今年の春、とうとう私は暇を見つけて、その桜を観に出かけました。助手の山口雪子が一緒でした。雪子のは、助手と言ってみたり、秘書と言ってみたり、うちの重役と言ってみたり、ときに依って違った紹介をするのが、私の習慣でした。「おかしいわね。どこにも、薄墨の桜のポスターがないわ。」新幹線で羽島駅に着いたときから、それが不思議でした。車で岐阜駅へ廻ってみても同じことでした。ちょっとした祠があっても、仰々しく宣伝ポスターを貼って、観光客を誘致するのが、この頃のことですから、樹齡千二百年などと唱い、万朶と咲いた桜の花の色刷り写真を掲げるくらいのは、あるのが当然ではないでしょうか。

岐阜駅で車を乗り替えて山へかかりました。前もって問い合せてあったので、四月の九日か十日が見頃だと分っていたのです。これも私のおかしな性癖なのですが、いま、薄墨の桜を見に、根尾までの深い山道にさしかかったのだと思いますと、何と云うのですか、もっと早く、もっと傍まで駆け寄って見たいような、或る焦躁に駆られるのでした。

美濃の山や谷や林や民家の風景は、絵で見た鉄斎の山水に似ています。いかにも、山の奥へ這入って行く感じなのですが、しかし、畑も山も民家も枯れた風景ではなく、たつぷりと肥えた感じを受けたのは、季節が春のせいかも知りません。

一体に、こう言う風流な目的で旅に出たことのない私は、何だか、鉄斎の点景人物になるのが、似合わないような気になります。「薄墨の桜を見に行くのだけれど、住吉屋って言う、その

宿屋から近いところにあるのか知ら、」と私は運転手に聞きました。「さア、薄墨の桜って、聞いたことがありますennaア、」と言います。きつと、ついこの頃、他県からこの土地へ働きに来た人なのだな、と思って聞いてみますと、もう三四年も、岐阜市内で仕事をしているのだと言います。「じゃア、桜を見に行くお客を、根尾まで案内すると言うことはないの、」「ありませんア、」と言うのです。しかし、考えようによつては、こんなに山の奥深く、桜の花が咲いていても、運転手が知らないと言うのは、いかにもありそうなことに思われました。

車で四十分。根尾村は山の奥の寒村と、東京郊外の外れにある町とが、一緒くたになったような印象をうけます。表に百姓道具を出したままの藁葺き屋根の家と、罐詰や雑誌や玩具を列べているペンキ塗りの店などが、軒を列べているのです。その町の中ほどに、私たちの宿がありました。ただ客が泊ると言うだけの宿で、何の飾りもないのですが、広い土間や庭の泉水のあとなどに、古くからある宿らしい気配が残っています。

座敷の中に、電熱の置炬燵が置いてありましたが、それだけでは体が温まりそうもないほど、寒かったです。日がもう暮れそうで、それに生憎なことに、小雨が降り出しましたが、私の癖で、それでも今日の中に、ちょっと桜を見ておきたいと思いました。「すぐそこに見えますよ。橋のところまでいらっしやると、」と言うのです。住吉屋と大きく書いた番傘をさしかけてくれました。田舎訛のちっともない、サラリーマンの奥さんみたいな、色の白い、ちょっときれいな

お内儀さんでした。

宿から広い往還を小半町ほど行つて、左手に折れますと、根尾川にかかります。いまどき、どうしてこんな朽ちかかった橋があるのでしょうか。橋桁の崩れたのが上から見えるような危うかしい橋を渡つて、ごろた道の狭い村道を上って行きますと、「あれですよ。あの谷あいの、大きな白壁の家の傍に咲いているでしょう。」と、通りがかりの人が教えてくれました。日暮れで、それに雨のせいで、確かに大きな白壁の家ははっきりと見えますが、その傍に咲いていると言う、肝腎の桜の花は、バックの白壁の中にとけ込んで、ぼうと霞んで見えるだけなのです。

あれがあつた、私のはるばると尋ねて来た「薄墨の桜」なのでしょう。雨の中の雲煙の彼方に、確かに桜の花らしい白い固まりは見えましたが、それは東京で見た青山墓地の並木の桜や、外濠そとぼりの丘の上の桜のような、あんな艶麗な感じとは全く違います。

私は勝手の違うものを感じて、幾分がっかりしましたが、或いは雨の中の、而もこんな遠見では、見当が外れるかも知れません。「でも、あそこまで、この下駄ばきでは無理じゃないでしょうか。ここでさえ、こんな泥んこの道ですもの。」と雪子と言います。それに、見上げる谷あいは、いまにも日が暮れそうなので、心を残しながら、宿へ引返すことにしました。

晩飯にやまめの串ざしのまま焼いたのが出ました。さっき、土間でそれを焼いているのを見ましたが、眼鏡をかけた、背の高い、いかにも料理人らしくない男だと思ったのですけれど、給仕

に出たお婆さんの話だと、ここの主人で、岐阜の高校の教師なのに、夕方、やまめを焼くときにだけ、手伝いをすると言う話でした。塩の加減がよくて、旨く焼けていました。

やまめは根尾川で釣れます。そういう釣りの客が、ここへ泊りに来るのです。しかし、桜を見に来る客はめったにないと言うことです。一昨日、東京の世田谷から、やはり私にこの桜の話をした同じ人から聞いたと言って、女客が一人、来ただけだと言うことです。或いはそうかも知れません。こんな山奥の寒村まで桜を見に来ると言うのは、あんまり酔狂なことかも知れません。

「でも、図案だけは何とかしなくてはね、丹青会には間に合せると言って、もう約束したんだから、」と私は言いました。丹青会と言うのは、私の重要な得意さきの一つであるデパートの伊勢丹が、豪華な都内のホテルを借切って催すのが慣例の、大がかりなきものの発表会のことなのです。「ですけど、」と言いかけて雪子は、ふと、その煤けた壁にかけてある一枚の、色紙の絵を見つけてました。「先生、これ、何でしょう、」「荒川豊蔵とサインがしてあるわ。おや、薄墨の桜の、幹と枝だけの絵だわ。幹と枝だけで花はないけど、雪子ちゃん、ちょっと、ここへ、画箋紙を拡げて、」と雪子に指図して、その荒川豊蔵の絵を模写させました。ここへ釣りにでも来て、花のない頃の桜を描いたものと思われます。

きもののデザインと言っても、私にとつては、謂わば面白半分に、気紛れにやっていたのでしたが、いまでは、それが仕事になりました。格別、絵が描ける訳ではなくて、ただ、色と形と空

間の配置を考えるくらいのことなのですが、それでも、何とか、きものになって行くのです。「そう、右の後身から斜めに大きく幹をとって、肩と袖に枝を拡げるのね。花はあとからつけて行くわ。」私の癖で、それからあとは、勝手に描いたイメージによって、これではなくてはならない、と言う、或る一つの雰囲気が生れて来るのです。「幹も枝も花も、全部、薄墨で仕上げて行くのよ。好いものになるかも知れないわ。」私はもう、七分通り出来たのも同じだと思って、雪子と肩を列べて、とにかく眠りました。固い木綿の蒲団の感触は、肩から風が抜けるように寒かったのですが、それも、久方振りに故郷の家を思い出すような、不思議に安らかな気持でした。

その二

翌日も雨は止みませんでした。ちょうど日曜日なので、宿の主人が案内してくれると言うのです。木綿の綿と派手な緋のモンペを借り、ゴム長の靴を借りて、雪子も一緒に宿を出ました。

一緒に歩いてみると、宿の主人は吃驚するほど、背の高い人でした。「この村では、薄墨の桜で客を呼びたい、と言う気持はないのでしょいか、」と、また同じことを聞きますと、「現状では、桜どころではない、と言うところです。ご覧になってもお分りのことと思いますが、ここは先年の大地震で、山崩れや何かで、その跡始末の土木事業が、まだ手つかずでいるところもあるので

すから、」と言います。そう言えば、村の橋や崖だけでなく、宿の裏庭の石燈籠や築地なども崩れたままだったのです。

今日は、昨日とは違った道を行いました。橋を渡らずに、反対に、村外れのごろた道を右に折れて、田畑の間の草深い小道を上ります。こんな道を、観光客が上る筈がありません。道端に、三四本のひよろひよろとした稚い桜の木が花をつけているほかには、何の風情もない道なのです。二三町も上ったのでしょうか。遠くから見たときは、それほど思わなかった白壁の家が、その谷あいをつぶすように、堂々と聳え立っているのに、先ず、吃驚しないではいられませんでした。そこから少し離れたところにある、何を祭ったのか分らない小さな神社の傍に、背後の白壁の家の堅固なたたずまいとは凡そ反対に、いまにも崩れ落ちそうな石垣があって、その下に、その桜の木があったのです。「あつ、」と声をのむ感じは、花がきれいだからではありません。

周囲の柵もまばらに落ちて、枝を支えている添木も不揃いで、幹囲三丈八尺、枝の拡がりが約二反歩と言う巨木が、老残の身を支えている姿は、無慙とも思われたからでした。大きな枝はただ残骸だけになり、その腐った先から、ひよひよと新しい枝が出て、か細い花が咲いています。その枝の分れ目の、大きく裂けたところはちょっとした空き地くらいの広さがあって、そこに黄楊の木の群生しているさまは一そう痛ましく、老残の木の枯死する寸前と言う感じがうけます。雨に濡れて、花はしっぽりとすぼんでいますので、晴れたら或いはもっと妖しい感じがしたのか

も知れませんが、一体に蕾は小さく、もう散り際なのでしょうか、その名の通り、仄かに薄墨色に見えるのです。

これでは、人がわざわざ見に来ないのも道理だと、私は思いました。周囲の山も畑も、この桜の美しさを包んでいると言う感じではなく、「もう枯れますよ、」と言う感じを露出しているのです。見ると、すぐ傍に、これも風雨に晒されて、字もはつきりとは読みとれないのですが、この桜の縁起を書いた建て札が立っています。

それによりますと、この桜は、昔この山奥に隠棲中の継体天皇が、都から迎えの人に連れられて里を離れるとき、ここにお手植えされたものらしいのです。そのときの御製と言う歌が書いてあるのですが、はつきりとは読めません。その歌の中に、僅かの間ここに住んでいたと言う意味なのでしょう、「薄住みよ。」と言う言葉があつて、それが、この桜の名のようになったのだと書いてあります。

こう言う古い話は、あとから作られたものかも知れません。しかし、こう言うとき私は、まず、その縁起をそのまま信じてみるのが好きなのです。それを信じますと、この桜の孤独な有様が、なお一そう無慙に思われます。私は一種の感動に心を奪われながら、もう一度、この桜に、万葉の花を咲かせることは出来ないものかと考えました。

小雨はまだ止みません。「金がないんですよ。」と主人がまた言います。「金がないのではなく